

言語発達遅滞児におけるコミュニケーション能力について (I)

— 語用論的伝達機能の評価による検討 —

高橋 泰子

(武庫川女子大学教育学科初等教育コース)

A Study of Communication Ability in Speech and Language Disability Children (I)

Assessment of the Pragmatic Transfer Functional

Yasuko Takahashi

Department of Education Faculty of Letters

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

This study is that interaction process analysis between speech and language disability children and their mother and therapist. It guide to the following considerations.

Adult must read and make the meaning that communication volition of verbal and non-verbal performance by child, for interaction is come into eistence between child and adult.

Children are the early stage of verbal aquisition who get to communication the aspect of action, and the communcation indication the function of communication is better than the verbal cummunication.

The Wetherby's assessment is effective for autistic children.

問 題

ことばは、ヒトを人間たらしめる行動であるが、どのようにしてことばが話せるようになるだろうか。この問いは半世紀、研究者の注目するところであり、特に発達心理学者達はそれぞれ何がしかの言語発達に関する知見を提供してきた。その中でも、Chomsky(1965)らの生成文法理論の出現は、後にことばとことばの関係からなる文の構造を扱う統語論やことばと物の関係を扱う意味論の研究を深化させるきっかけとなり、今日の言語発達研究の強力な推進力になったと言えよう。

この理論による言語能力 (competence) の研究は「伝統的な記号研究の3分野、あるいは、構造言語学のストラテジにもとづいて、意味および統語構造と意味との関係(土屋, 1991)」で行われており、言語というのはまず生得的能力を深層構造 (deep structure) に持ち、このシステムが中心となって文が作られていくという考えであった。1960年代ではこれが言語学の主要な動向であった。

さらに、生成文法理論から発展した生成意味論派は、言語研究の基礎は意味論 (semantics) を中心においた研究を進めていった。しかし、同じことばを使っても環境や文脈 (context) によってその意味が変わることから、意味論だけでは理論が成り立たなくなってしまった。また、この理論は「意味と意志伝達との間の、また意味と発話行為との間の関係を看過している」と Searle(1974) が指摘するように、普遍的な言語能力に焦点を当てた研究であったため言語能力は社会的、背景的環境の中で発現して言語活動が営まれる様子そのものを研究する「語用論」(pragmatics) とは意見を異にした。

意味論での矛盾を解決すべく生まれた語用論は、1970年代に入り Stalnaker により2つの大きな部門に分けられた。ひとつは「形式意味論」と呼ばれるもので、言語の使用場面を参照した意味論を厳密に構成することが試みられた。(Lemon, E. J., Kaplan, D., Scott, D., Montague, R., Thomason, R.)もう一方は、「言

「語行為理論」と呼ばれるもので言語を使用する際には、言語的な意味だけでなく、話し手と聞き手の思考過程も意味の理解の必須の要素と考えるインプリカチュア理論も含まれている。これは Austin(1962) が提唱したもので「言語の使用の状況全体に関する理論」であり、発話行為、発話内行為、発話媒介行為という3つの行為を定義してその相互関係を明らかにした。さらにこの理論を Searle(1969) が進めて「発話行為論」(speech act theory) として確立した。その理論では、例えば、3時頃来客がありその客が手土産に菓子箱を持ってきたとする。子どもは客が帰った後母親に「この箱に何が入っているの?」という〈発話行為〉を行ったとき、この状況での〈発話内行為〉は「このお菓子ちょうだい」という要請の意図を含んでいる。そして母親がこの〈発話内行為〉に対して「おやつ時間にしようね」と言ってこの菓子を子どもに与えると〈発話媒介行為〉が行われたことになる。しかし子どもの〈発話行為〉に対して「クッキーよ」としか母親が応えなければ、これは意味論で扱う命題行為となり、Searle の理論の中では使われていない。

Austin の理論は言語学のみならず、言語発達研究にも波及し、近年、Halliday(1975) や Dore(1975)、Bruner(1978)、Bates(1972) らにより、語用論の観点から乳幼児期の言語発達の研究が行われている。この見地では、どのような文脈や場面でどのような語の使用をするか、それが言語獲得前の原言語(proto-language) と呼ばれる音声であっても、それらを調べることで乳児の伝達意図を把握しようとしたものである。

この語用論の観点は言語発達研究や言語障害研究にも導入され、一語文以前の前言語的伝達行動にも焦点が当てられてきている。この観点は、言語獲得は人との相互作用を通じて行われ、言語獲得過程において大人の関わりにも重要な役割を担っていると目を向けられている。臨床研究でもこの観点からの評価や治療方法が用いられている。

子どもの言語の意味的内容や認知的基礎を調べるとき、会話の文脈によって影響を受け、言語がその場面や状況によって異なった機能をするといったように、文脈の影響を考慮した語用論的アプローチが必要となる。例えばコミュニケーションということを考えていく場合に、それがコミュニケーションとして成立するにはまず読み手効果段階がある。乳児がまだコミュニケーションの意図を持って手段としての動作をしたり泣いたりするのはなく、動作をしている段階で、読み手がそれをお腹が減ったから泣いているのだらうという、その泣き方に空腹と言うことを読み取って意味をつけ、ミルクを与える。こういった、最初のコミュニケーション段階というのは読み手効果段階で、相手を読み取ってくれるために、そこにコミュニケーションの効果が生ずる段階と言える。子どもは、まだ意図を持っておらず、何も自分からシグナルを出したわけではないが、大人がそれを読み取って、それに応じた行動をしてくれるから、結果的にはそれがシグナルの役割を果たすことになる。Austin はこのような評価方法を発話行為アプローチと呼んでいる。

このような語用論的アプローチには、社会学における会話の分析方法や心理学における母子相互作用の研究手法、言語心理学における健常児への言語インプットの研究などから導かれた相互作用的アプローチ(interactional approach) と、会話の文脈の観点から言語を調べようとする event focus approach の2つの流れがある(田中, 1989)。この2つのアプローチを別々の観点として分析されたものはいくつか見られるが、2つの観点から1つの対象を分析したものはまだ見られない。

そこで、今後の言語発達研究のひとつとして、母子間の日常の出来事の知識がフォーマットからスクリプトへ発展させるためのアプローチが、この2つの視点からの分析が必要と考えられる。

目 的

Nelson(1985) によれば、乳幼児は1歳前後にはすでに行為としてスクリプトを持っており、3歳を過ぎる頃にはかなり詳細で秩序だったスクリプトの言語化が可能であると報告されている。それを参考に就学前の言語発達遅滞児と大人との相互作用過程を言語行動の語用論的機能に着目し、相互作用の役割交替、大人の働きかけの効果(相互作用的アプローチ)と、フォーマット、スクリプト(event focus approach)を分析することによって子どものコミュニケーション能力の発達及びその周辺領域の発達の諸側面との関連を検討する。

なお、本論文は相互作用的アプローチを中心に報告し、次巻では event focus approach を中心に報告する。

また、本研究では言語発達遅滞児とはコミュニケーションの手段に使用する言語に発達の遅れが見られるものと考え、精神発達遅滞児と自閉症児を、大人は母親とセラピストを分析対象とし、その違いを比較検討する。

方 法

1. 対象児及び対象者

対象児は自閉症児1名を含む精神発達遅滞児3名、対象者はその母親及びセラピストである。以下に対象児の生育の状態の概要を記する。

N児(男児:精神発達遅滞児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重2560g 始歩1歳3カ月 生後1年までの発達は正常。始語は1歳6カ月から2歳の間に「アーチャン」「パパ」等があった。聴力も脳波も異常は認められないが、保健所の3歳児健診で言語発達遅滞と言われる。

S児(男児:精神発達遅滞児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重2880g 始歩1歳6カ月 始語2歳6カ月 ことばの遅れに一番初めに気づいたのは祖父であり、初回の相談に訪れたのも祖父であった。本児は第一子であり、周囲の大人から非常にかわいがられて生育しており、保育所では自分で食事を取ることができるにも関わらず、家庭では母親もしくは父親が食べ物を口に運んでやるといったことが初回面接時ではあった。母親が何でも先回りして子どもの世話をやいているという傾向が見られた。

R児(男児:自閉症児)

周産期には特に異常はなく満期正常分娩。生下時体重3040g。始歩1歳2カ月 乳幼児期より人への感心は薄くおとなしかったが、母親に抱かれると視線が合いよく笑った。10カ月ごろより母親の働きかけに対してあまり反応を示さなくなる。1歳過ぎに喃語が現れ、1歳3カ月ごろ「マンマ」「ブーブー」を言うようになるが、それらのことばが2歳頃から消失し、その後「ネンネ」(寝る)、「ダイダイ」(要求するとき)、「イヤー」の発語が不明瞭ではあるが出現している。物に関して、水、砂、整然と並んだ数字やアルファベット、キャストに執着しやすい。

Table 1. Tsumori and Inage development assessment for children

	CA	運動	探索・操作	社会	生活習慣	理解・言語
N児	5:0	5:0	3:0	3:0	4:6	1:9
S児	5:10	3:6	2:6	2:6	2:0	3:0
R児	2:10	3:0	2:0	0:11	1:9	0:11

2. 手続き

(1) 観察の方法

①観察期間

期間は6カ月、1週間に1回ないしは2週間に1回観察した。初回観察を除いて初めの月から2カ月目を第Ⅰ期、3カ月目から4カ月目を第Ⅱ期、5カ月目から6カ月目を第Ⅲ期とする。

②観察場所・場面設定

プレイルームにおいて、対象児は用意されている玩具は自由に使って遊ぶことができる。また、母親には、対象児が用意した玩具に興味を示さない場合は対象児の自由に任せてよいことと、できるだけ禁止をすることのないようにした自由遊びをしてよいということを前もって説明しておく。なお、母親にはセラピー後必要に応じて対象児との相互作用が促せるように指導する。

③観察手続き

1セッション対象児と母親が30分、もう1セッションを対象児とセラピストが30分ずつ関わり、1日2セッション60分行う。それをVTRで録画する。

なお、対象児に母親が前半関わったセッションの次の日のセッションは、前半をセラピストが、後半を母親というように、関わる対象者の順番を交替した。

(2) 分析方法

VTRで録画されたものは、対象児と対象者の相互作用を分析するためにセラピー開始10分後から50の伝達行為のトランスクリプトを作成する。そして、さらに両者の関係を明確にするために、これをもとに以下の分析を行う。

①対象児と対象者の相互作用はどのように進行しているのかを明らかにするために、文脈的に連続する50の伝達行為を実線もしくは破線で結び (Table 2) 他者にインパクトがあったか否かを矢印を付けて示し、

トランスクリプトを作成する。1つの伝達行為は、対象児もしくは対象者は、他者や物との相互作用を開始したときに始まり、対象児もしくは対象者の注意の焦点が移行し、あるいは順番が交替したときに終了する動作・発声・発語であるとする。各伝達行為は独立して記述され、合わせてその伝達行為の先行事象と後述事象も記述する。

なお、対象児の発声が誤音であれば修正して再生表記をする。

- ②相互作用は、どの様な行為で伝達されているかを5種類に分類する。動作と発声または発語が同時、継時的に生起する場合は、複合伝達行為と見なし1つの伝達行為として扱う (Table 3)。
- ③継時的に記録された各伝達行為を文脈情報に照らしあわせて、Wetherby & Prutting(1984)の15の伝達機能のカテゴリーを参考にし、反応的機能を加え16の伝達機能のカテゴリーに分類する。また、伝達機能のカテゴリーに分類されたものを環境の結果事象を導く相互作用の行為(環境的相互作用の行為;物理的の必要を満たす反応—RO, RA, PR)と社会的結果事象を導く相互作用の行為(社会的相互作用の行為;他者を巻き込んで自分自身に注意を集中させる言語・非言語的の反応—RS, RP, RI, AO, S, C, R)とに分類し、Wetherby & Prutting, 佐竹・小林(1988, 1989, 1990)が示す自閉症児の結果と比較・検討する。

Table 2. The marks in transcript

成立	伝達意図のある開始に対する反応	→
	伝達意図のない行動に対する読み手側の反応	→
不成立	同時開始またはズレ	→
	どちらにも伝達意図がある場合	≡
	どちらにも伝達意図がない場合
	片方のみ伝達意図がある場合	—

Table 3. The aspects of communication

A	: 動作action	A+V	: 動作と発語の併用
V	: 発語verbal	A+P	: 動作と発声の併用
P	: 発声pre-verbal		

Table 4. Definitions of communication functional category

Category	Definitions
相互作用的機能; 物の要求的機能 (RO) request objet	手にいれたいものを他者に要求するための動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
行為の要求的機能 (RA) request action	ある行為(援助など)の実行を他者に命令するための動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
社会的ルーチンの要求的機能 (RS) request social routine	ゲーム的なやり取りを開始・継続することを他者に命令するための動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
許可の要求的機能 (RP) request permission	ある活動を行うために他者の許可を求めするための動作・発声・発語。 他者に話しかけて反応を待つ。
情報の要求的機能 (RI) request information	事物についての情報を他者に求めるための動作・発声・発語(行為を引き出すWh質問を含む)。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
抗議・拒否的機能 (PR) protest	他者の誘い掛けを拒否したり、提示された物を拒絶したり、先行の伝達行動に対する拒否的な動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
友好表示的機能 (AO) acknowledgement of other	他者の注意を自分に向けさせるための動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。他者に話しかけて反応を待つ。
差し出し・渡し機能 (S) shouting-off	他者の注意を自分に向けさせるために、物や他者に差し出したり見せたりすることを含む動作・発声・発語。 他者に話しかけて反応を待つ。
情報の機能 (C) comment	他者の注意を事物に向けさせたり、情報を他者に伝えたりするための動作・発声・発語。 物や他者に話しかけて反応を待つ。
反応的機能 (R) response	相手によって引き出された情報に了解の意見を与えたり、先行の伝達行動に対する承認を与えるための動作・発声・発語。物や他者に話しかけて反応を待つ。
非相互的機能; 遂行的機能 (SR) self-regulatory	自分自身の運動的活動を言語的に示すための発声・発語。 他者には話しかけないが、物や事象には話しかけ、反応を待たない。
道具的機能 (L) lagel	事物を同定し、自分自身の物理的、心理的モードを満足(それに自分の注意を集中)させるための動作・発声・発語。 他者には話しかけないが、物や事象には話しかけ、反応を待たない。
活動に伴う発声 (P) performative	物を用いて運動的活動を行う際に産出される習慣化・儀式化された発声・発語。 他者には話しかけないが、物や事象には話しかけ、反応を待たない。
感嘆 (EX) exclamatory	事象や場面に対する感情的反応を表出する動作・発声・発語(驚き、喜びなどを含む)。
表出的機能 (RE) reactive	伝達意図がなく他者のことを繰り返したり、物や人が発する音声に対して反射的に産出する発声・発語。 他者には話しかけないが、物や身体の部分に話しかけ、反応を待たない。
無焦点 (NF) nonfocused	いかなる物や人にも集中していないに関わらず産出される発声・発語。また、自分自身のみの環境を創造する動作。 物や人に話しかけず、反応を待たない。

結果と考察

1. 伝達的行為

対象児と対象者の相互作用をトランスクリプトに記録し、相互作用の成立・未成立を分析した結果、Table 5のとおりである。

①相互作用の成立

まず、大人の読み取りについて視点をみてみると、N児は、対象児の中でI期から大人に一番意図的伝達を多くしている。N児からの意図的伝達は、I期において母親に対してもセラピストに対しても差が無い。III期においては、母親に対してはI期と余り変化はないが、セラピストに対しては増加している。また、N児に対する大人の応答性はI期においては、セラピストよりも母親の方がやや多く相互作用が成立しているが、III期においては母親よりセラピストの方がやや多く相互作用が成立している。対象児の母親3人の中で、N児の母親はI期からセラピストと応答性にあまり差が無いということから、センシビティの高さが窺われる。

S児は、I期において意図的伝達が母親に対してよりもセラピストに対しての方がやや多くしているが、III期になるとその差がさらにひろがり、母親に対してもI期に比べれば増加しているもののセラピストの方がかなり増加している。そして、大人の応答性はI期から母親とセラピストにかなり差がみられ、それは、III期まで続いている。セラピストのN児とS児の応答性を比較してみると、さほど大きな差はみられないが、母親の応答性を比較すると差がある。このことから、S児の母親にはS児との相互作用を促すための指導が必要である。

R児は、対象児3人の中でも最も意図的伝達が少なく、I期において意図的伝達がセラピストに対しては全くされておらず、母親に対しても少しあるくらいである。しかし、母親よりセラピストの方が相互作用が成立している。II期になるとR児からの意図的伝達はセラピストに対してかなり増加しているが、セラピストの応答性はI期とあまり差はない。これはR児のコミュニケーション能力の向上が窺われる。しかし、III期になるとR児からの意図的伝達はII期に比べて母親に対してもセラピストに対しても減少しているが、大人の応答性は母親もセラピストも向上している。R児においては大人の多少の応答性が向上しても、または応答性が低下しても、R児自身の意図的伝達には大きく影響しないようである。これは自閉症児の指導の難しさを示唆する。

次に、対象児の読み取りに視点をみてみると、対象児3人共に大人が意図的伝達をしていないが大人の行動に意味付けをして反応するというものは、S児において少し観られる程度でほとんど成立していない。しかし、大人からの意図的伝達はどの母親もセラピストも大きな差はみられないが、対象児の応答性には差がみられる。

N児は、I期においてセラピストより母親に対しての方が多く相互作用が成立している。しかし、III期になるとI期の母親とに対してよりセラピストに対しての方が相互作用の成立が少しではあるが増えており、N児のコミュニケーション能力の向上が観られる。

S児は、I期において母親に対してもセラピストに対してもほぼ同じくらいの相互作用が成立しているが、III期になると母親に対してよりもセラピストの対しての方がかなり多く相互作用が成立している。S児においてもコミュニケーション能力の向上がみられる。

R児においては、II期のセラピストに対しての相互作用がやや多く成立したのを除き、I・II・III期を通してほとんど相互作用の成立には差がなく、R児のコミュニケーション能力の変化がこの点では観られなかった。

Table 5. The interaction in communication between children and adult

	子どもから母親			子どもからセラピスト			母親から子ども			セラピストから子ども					
	I期	II期	III期	I期	II期	III期	I期	II期	III期	I期	II期	III期			
N→M	43	41	43	N→T	42	32	50	M→N	43	35	41	T→N	28	27	46
N→M	2	3	2	N→T	3	4	0	M→N	6	14	6	T→N	22	21	4
N→M	3	4	5	N→T	3	14	0	M→N	1	0	0	T→N	0	1	0
N→M	2	2	0	N→T	2	0	0	M→N	1	1	3	T→N	0	1	0
S→M	18	13	24	S→T	32	35	43	M→S	23	18	21	T→S	27	28	40
S→M	13	10	9	S→T	1	4	5	M→S	20	27	20	T→S	21	22	8
S→M	9	11	2	S→T	15	10	1	M→S	1	1	3	T→S	0	0	0
S→M	10	16	15	S→T	2	1	2	M→S	6	4	6	T→S	2	0	2
R→M	4	3	3	R→T	0	17	12	M→R	16	12	15	M→T	12	21	11
R→M	1	5	1	R→T	0	5	0	M→R	24	26	31	M→T	32	29	39
R→M	21	22	36	R→T	34	18	38	M→R	0	0	0	M→T	0	0	0
R→M	24	20	10	R→T	16	10	0	M→R	10	12	4	M→T	2	0	0

N→N児 S→S児 R→R児 M→Mそれぞれの対象児の母親 T→セラピスト

②相互作用の未成立

対象児もしくは大人の注意の焦点が移行し、順番が交替したにも関わらず意図的伝達をせず、そして読み手側もそれに反応しなかったものに視点を置いてみる。

N児においては、母親であってもセラピストであっても相互作用が多く成立していたので、当然のことながらⅠ・Ⅱ・Ⅲ期を通して未成立は3例の中で最も少ない。

S児においては、母親とにおいての方がセラピストにおいてよりも相互作用の未成立が多い。その原因としては、相互作用の順番としてはS児が開始もしくは継続するはずだったものが意図的伝達をせず、その読み手の母親がそれに反応をしなかったことにある。

R児は、Ⅰ期で母親とにおいてとセラピストにおいてとは差はあるものの相互作用の未成立が多い。これがⅡ・Ⅲ期になると母親とにおいてもセラピストとにおいても未成立が減少していている。その原因は、S児の例と同じように、相互作用の順番としてはR児が開始もしくは継続するはずのものが意図的伝達をせず、そして読み手の大人がそれに反応しなかったことにある。しかし、Ⅱ・Ⅲ期になると読み手の大人がそれに反応することが増加したため、相互作用の未成立が減少したといえよう。

3事例を通して、相互作用の成立・未成立に関して考察されることは、対象児側にも大人側にも起因するといふことである。理解・言語の未発達な対象児を生活年齢が同じの健常児にするように大人が意図的伝達をしても、相互作用はなかなか成立しにくいものがある。しかし、対象児の言語獲得は、文法的なことばを発する前にすでに始まっているのである。子どもと大人がお互いのやり取りを察知できるような相互作用を行うことによってコミュニケーションを高め、そして共有するトピックスをプレイルームから家庭へ、現実を構成するものへと展開させていかなければならない。お互いのやり取りを察知できるような相互作用を行うためには、まず、大人の援助が必要である。大人が子どもの行為から伝達意図を読み取ってあげることにより、子どもは指示の意味付けの方法、さらには意図的伝達を現実にする方法、すなわち文法を習得していくことになるのであろう。

母親よりセラピストとの相互作用の成立が多い子どもは、すでに相互作用には役割交替(話し手と読み手)があるということを知得しているため、母親が子どもの察知しやすい意図伝達をすることによって、相互作用の成立数が増加すると予想される。

2. 伝達行為の様相

Table 6は、対象児から大人への様相別に相互作用の成立したものと、大人から対象児への様相別に相互作用の成立した数を示したものである。サンプル数が、様相により差があるので様相別で比較することの妥当性は高いとは言えないが、N児は母親に対しては動作で伝達することが多い。しかし、動作と発語を併用したものが最も相互作用が成立しやすい。そして、セラピストに対しては動作と発語を併用して伝達することが多く、その様相で伝達したものが最も相互作用が成立しやすい。これは、母親に対しては非言語でも意志の疎通ができるが、セラピストとはそういったことがⅠ・Ⅱ期ではまだできないので発語を併用し、Ⅲ期になるとセラピストとも共通の話題が増加したため、動作のみで意図伝達をしたと考えられる。

伝達行為の様相の発達には、動作による伝達行為が言語出現の前提であり、動作が音声言語に併用されるのは言語発達のごく初期に限られた過渡期的な現象と見なされる傾向があった。しかし、岡田(1989)の研究観察からは「言語の獲得の初期段階においては動作の役割が直ちに減じることはない。場面や事態によっては音声言語によるよりも高次の表示能力を持つことさえめざらしくない」と考察しており、その他にも(山田1982, 荻野他1983)同様の考察をしている。N児の研究観察も岡田らの研究と同様で、音声言語を獲得した初期段階では動作の役割はすぐに減少するというものではない。音声言語で表現しきれない部分は動作で伝達をしたり、むしろ音声言語で伝達するよりも動作で伝達することのほうが他者にインパクトを与える場合があると考えられる。

一方、大人は意図的伝達に用いる様相は音声言語によるものが多く、しかもそれを単独で用いるというよりも動作と併用することが多い。母親の音声と動作を併用した行動は有効性が高く、N児の積極的な応答を促している。また、セラピストからの発語のみの意図的伝達の相互作用が成立しているのは、読み取り手となるN児の理解言語の多さからいえることであろう。

S児は、母親に対してもセラピストに対しても動作で伝達することが多い。S児は二語文が出現しているにも関わらず動作で伝達することが多い原因として考えられることには2つある。ひとつは、母親がS児から積極

的な応答を待たずして行為を起こすため、S児自身が行為を起こさずとも周囲の大人が行為を起こしてくれるという態勢ができてしまったということ。もうひとつは音声言語で伝達しても不明瞭なため大人が読み取れないので動作で補っていたのが、動作で伝達する頻度を高めてしまった。このいずれか、あるいは二原因が問題としているのではないかと考察される。

母親もセラピストも意図的伝達の相互作用に用いる様相は動作と音声言語を併用することが多く、そしてそれが相互作用の成立を高めている。

S児においても大人からの2つのメディアをした併用行動がS児の積極的な応答を導き出しており、動作が伝える意味をより明確にするために音声言語で補うことによって、S児の注意が喚起されたと考えられる。

R児の意図的伝達は少なく、そして発語からI期からIII期まで母親に対してもセラピストに対しても全く出現しなかった。発声はII・III期に出現したが、単独ではなく動作と併用したものがほとんどで、発声のみの意図的伝達はII期でセラピストに対して1度あっただけでそれ以外はみられなかった。R児は音声言語を伝達的手段にするという意図は非常に希薄で、動作での伝達が音声言語よりも高次の表現能力を獲得したと考えられる。就学してからも表出言語も持たない自閉症児がいるが、R児もそういった傾向がすでにこの時期からみられるので、発声を喚起することと、伝達意図を持つような関わりを見つけていくことが必要だと考える。母親に対してよりもセラピストに対しての方が僅かではあるが動作と発声を併用した意図的伝達をしているので、セラピストの関わりが今後の関わりへの参考になるのではないかと考える。

セラピストは母親より動作と音声言語を併用した伝達が多く、そしてそれでの伝達は相互作用の成立を多くしている。母親の場合でも併用した伝達が相互作用の成立を多くしているため、今後の関わりとしても併用した伝達でR児の伝達能力を高めていくことが必要であろう。

3事例を通して考察されることは、大人が子どもからの意図的伝達を促すためにはまず、注意を喚起するような伝達をすることが必要である。その様相は言語獲得の初期段階の子どもに対してでは、動作と音声言語を併用して伝達することが有効と考えられる。山本(1987)の研究観察でも10カ月の乳幼児には視線をそらして音声言語のみで提示・要求をするよりも、視線をそらさずに音声言語と併用して提示・要求をした方が有効であるという結果が出ており、本研究と相違ない。

3. 伝達機能

それぞれの相互作用の伝達を機能分けし、さらに伝達機能のカテゴリーに分類されたものを環境的結果事象を導く相互作用的行為(環境的相互作用的行為;物理的必要性を満たす反応—RO, RA, PR)と社会的結果事象を導く相互作用的行為(社会的相互作用的行為;他者を巻き込んで自分自身に注意を集中させる言語・非言語—RS, RP, RI, AO, S, C, R)とに分類し、Wetherbyら(1984)や佐竹ら(1988, 1989, 1990)が示す自閉症児の結果と比較・検討した。

Table 6. The interaction is brought in existence in the aspects communication

	I期	II期	III期	I期	II期	III期	計	I期	II期	III期	I期	II期	III期	計	
N→M/N→M				N→M/N→M				計	N→T/N→T			N→T/N→T			計
動作A	9/10	1/3	2/4	5/11	5/14	4/18	26/62	2/2	5/5	12/14	7/8	4/5	0/1	30/35	
発語V		2/2	1/1				3/3	2/2	2/2					4/4	
発声P	1/1	0/1			3/9		4/11		1/1	3/3				4/4	
A+V	8/15	7/10	5/8	0/1	3/4	3/3	26/41	18/18	18/18	16/17	2/3	2/2		56/58	
A+P	1/4	3/7	4/7	3/6		3/9	14/33	10/11	8/13	10/12	6/6	4/4	1/2	39/48	
M→N/M→N				M→N/M→N				計	T→N/T→N			T→N/T→N			計
動作A	5/9	2/3	2/3	1/5	0/3	0/3	10/23	1/1		1/1	0/1		0/2	2/5	
発語V	5/14	3/17	3/17				11/48	13/20	24/38	28/30	0/1			65/89	
A+V	13/22	13/25	13/25	0/2	1/2	1/2	41/78	14/27	4/12	14/17				32/56	
S→M/S→M				S→M/S→M				計	S→T/S→T			S→T/S→T			計
動作A	30/32	14/15	17/19	3/5	1/2	4/4	69/77	36/37	21/21	21/21	1/2	10/10		89/91	
発語V	1/1	2/2	7/7				10/10		1/1	8/8				9/9	
発声P			3/3				3/3			6/6				6/6	
A+V	3/3	5/5	8/8		1/2		17/18		6/8	8/8				14/14	
A+P	9/9	20/22	8/8		1/2	1/1	39/42	7/9	5/5	7/7	1/2	4/4		24/27	
M→S/M→S				M→S/M→S				計	T→S/T→S			T→S/T→S			計
動作A	7/8	6/8	1/3	1/1	0/1	0/1	15/22	2/2	1/3	1/1		0/1		4/7	
発語V	8/11	16/23	16/18	0/1		0/2	40/55	3/6	2/9	21/22		1/1		27/38	
A+V	27/29	13/18	24/26				64/73	22/42	24/36	24/27				70/95	
R→M/R→M				R→M/R→M				計	R→T/R→T			R→T/R→T			計
動作A		1/5	3/3	33/49	19/32	13/19	69/108		8/12	7/7	32/48	11/20	24/24	82/111	
発語V															
発声P						1/1	1/1		1/1			1/1	3/3	5/5	
A+V															
A+P		2/3	0/1	1/1	3/10	21/26	27/41		7/8	5/5	2/2	7/8	11/11	32/34	
M→R/M→R				M→R/M→R				計	T→R/T→R			T→R/T→R			計
動作A	14/29	5/20	1/10	0/7	0/9	0/2	20/77		1/3	1/7	0/2			2/12	
発語V	0/4	0/3	2/15	0/1			2/23	1/13	4/9	0/13				5/35	
A+V	3/8	7/15	12/21	0/1	0/3	0/2	22/50	11/35	16/38	10/30				37/103	

Wetherby らの自閉症児は高頻度の物の要求、行為の要求、及び抗議・拒否と、低頻度の感嘆、表出、及び無焦点発話を示した。そして、他者への友好表示、差し出し・渡し、情動的、道具的機能の欠如を示した。また、佐竹らの自閉症児は高頻度の遂行的機能及び道具的機能、低頻度の物の要求、行為の要求、抗議・拒否、活動に伴う発声、感嘆、及び無焦点の発話を示した。そして、社会的ルーチンの要求、情報の要求、他者への友好表示、差し出し・渡し、及び表出的機能を示さなかった。

N 児・S 児は、Wetherby らの健常児と同じく、もしくは多く相互作用の行為を用いた。そして、友好表示機能の出現が健常児より多く出現している。このことは、伝達行為の希薄さから大人への依存が健常児より高いことを窺わせる。

環境的相互作用の行為と社会的相互作用の行為との出現率を比較すると、Wetherby らの自閉症児は高い割合の環境的相互作用の行為と低い割合の社会的相互作用の行為を示した。そして、健常児は社会的相互作用の行為よりも環境的相互作用の行為の方がやや高い割合の出現を示した。しかし、N 児と S 児はよく似たプロフィールで、社会的相互作用の行為が高い割合を、社会的相互作用の行為は低い割合を示し、Wetherby らの自閉症児とも健常児とも異なった結果となった。

また、自閉症児の R 児の相互作用の行為は Wetherby らの自閉症児や佐竹らの自閉症児よりも少ない使い方であった。しかし、そのプロフィールは似ており、社会的相互作用の行為よりも環境的相互作用の行為の出現の割合が高かった。

本研究の結果と佐竹らの結果から、言語獲得の初期段階の自閉症児には Wetherby らの伝達行為の評価は有効であることが示唆された。伝達行為を機能分けしたとき、要求機能と称するものの中に物を取ってほしいという要求も、大人の気を引きたいという要求もひとまとめにされてしまう傾向があった。しかし、それでは自閉症児の状態は把握しきれないことが本研究からも考察される。そして、花熊(1990)が精神遅滞児の前言語的伝達行為の機能は原命令よりも原叙述を示す傾向があると示したように、言語獲得の初期段階の健常児と言語発達遅滞児とも違ったプロフィールを示すということが示唆された。

一方、大人からの有効な伝達機能は高橋(1990)が示すように、物の要求的機能、行為の要求的機能、抗議・拒否の機能の出現率が高かったり、連続するときは、子どもからは意図的伝達が示されにくく相互作用が成立しにくい。すなわち、大人は環境的相互作用の行為を最小限に控えることが相互作用を成立させる要因となることが考察される。

全体の考察

本研究では数量的な分析は数人の評定者の協力を得て一致率 75% で、以下 4 つの側面から考察を進めた。

① 子どもと大人の相互作用を成立させるためには、お互いがやり取りを察知しやすい状態になることが必要である。そのためにはまず、大人の援助が子どもには必要で、大人が子どもの行為から伝達意図を読み取り、そして、意味付けをすることによって相互作用を成立させる手がかりを作っていくのである。そのような積み重ねから子どもは伝達手段を獲得していき、相互作用がより成立しやすい状態へとなっていく。

② 言語獲得の初期段階では、動作での意図的伝達は重要な役割を担っており、音声言語より高次な表示をすることも珍しくない。また、大人もそのような時期の子どもに対しては音声のみで相互作用をしようとするのではなく、動作とも併用した伝達行為の方が有効である。

③ 自閉症児の伝達機能は Wetherby らの自閉症児と似たプロフィールを示し、Wetherby らの伝達機能の評価は有効であることが示唆された。しかし、精神発達遅滞児は健常児とも自閉症児とも異なったプロフィールを示したので、精神発達遅滞児に対しては Wetherby らの伝達機能の評価の有効性は、サンプル数も少ないこともあって確信はできない。

④ さらに、大人の伝達機能を分析したところ、相互作用を促すために有効なことは、環境的相互作用の行為を最小限に控えることである。

以上の 4 つが示唆されたが、言語を獲得するためには大人の援助は重要な役割を担っている。そのためには一方的に話しかけるばかりでなく、子どもの意図するものを読み取れるセンシティブティを高め、より子どもが相互作用を察知しやすい状態へと持っていくことが必要である。